

## 広島平和記念式典小中学生派遣事業

平和とは、世界のどんな人も  
お互いに傷つけ合ったりしないこと

宮浦敦也さん（富士見小）

幸せな時  
それは、家族や友達と笑っていられて  
何気ない日常を楽しんでいられる時

進俊也さん（磐田第一中）

平成21年4月、磐田市は『核兵器廃絶平和都市宣言』を制定し、核兵器の廃絶、平和の尊さを訴えている。

その取り組みの一つとして、これからの時代を生きる若い世代に自分自身で何かを感じ、伝えてもらおうと、平成22年度から『広島平和記念式典中学生派遣事業』をスタートさせた。

4年目となる本年度は、市内11中学校の代表に、初めて市内23小学校の代表を加え34人が広島を訪問した。一団は被爆桜の苗木を譲り受けた安田女子高等学校（広島市中区）を訪問、原爆ドームや広島平和記念資料館の見学、そして広島平和記念式典へ参列した。

原爆の投下から68回目の8月6日を広島で迎えた小中学生は、そこで何を感じたのか。彼らがその目で、耳で、心で感じた「広島」、そして「平和」を彼らの言葉で紹介する。



▲安田女子高校の被曝桜の前で。生徒会の皆さんと34人の小中学生

そこでしかわからない

「何か」を受け止めに

7月30日の結団式で、初めて顔を合わせた34人の小中学生。緊張した面持ちで自己紹介をした。その言葉には、戦争と平和への思い、そして決意が感じられた。

国語の授業で勉強して平和や戦争について考えるようになりました。この貴重な体験を大切にしていきたいと思えます。そして、本物を見て、体験した学びを家族や友人、学校のみんなに伝えたいです。伊藤壮舞さん（長野小）

多くの祖父は広島市の原爆を受けました。祖父が話しながらない戦争の体験をこの2日間で学び、友達に伝えたいと思います。藤本聖生さん（岩田小）



▲一人一人がそれぞれの思いを語った結団式

原爆ドーム

広島に着き、安田女子高校を訪問した後、平和記念公園に入っていくと、原爆ドームが彼らを迎える。近づくにつれ、その姿に圧倒され、彼らは言葉少なにドームを見つめ続けた。

ひとつの原子爆弾がたくさんの命を奪い、とても悲しくなりました

小川みづきさん（福田小）

そこに建っているだけで、当時の被爆・戦争の恐ろしさ、悲しさを私に訴え、平和であることがどれだけ幸せかを伝え、そして、ずっと平和であり続けることを祈っているようでした。建物だけれど、私には感情を持つているように見えました。長谷川扶実さん（南部中）

原爆ドームは、その迫力が私たちに核兵器廃絶や平和を呼び掛けているのかなと思えました

永田麻理奈さん（豊田北部小）



※被曝桜…広島市の安田女子高等学校で生き続ける、原爆の被爆樹木に認定された貴重な桜。爆心地から約2.1kmしか離れていないにもかかわらず奇跡的に生き残った。同校生徒会が、桜の命を後世に引き継ぐため接ぎ木で増やしている。平成21年には9本の苗木を譲り受け市内の中学校などに植樹した。

## 広島平和記念資料館

被爆者の遺品、被爆の様子を示す写真や資料などの展示をその目で見て、彼らは数々の思いを心に刻んだ。

悲惨な被爆再現人形や遺品を目にして、原爆の恐ろしさに身震いしました

大庭千央さん（豊田中）

「私たちのこの現状を見て！こんな悲しいできごとだったんだ」と感じ、学びました 酒井菜穂さん（竜洋北小）

投下された原子爆弾の模型を見て、こんなにちっぽけなものが28万人もの命をうばったのかと思うと涙がとまりませんでした 名倉和さん（神明中）



資料館で食い入るように展示を見つめる



▲ 式典の開始前に思いを込めて鶴を折る

## 平和記念式典に参列

訪問2日目。平和記念公園で行われる平和記念式典に参列。被爆者や遺族代表、そして70カ国以上の代表らと共に、原爆で亡くなった方々を悼み、平和への思いを新たにしました。

原爆が投下された午前8時15分に「平和の鐘」が鳴り、黙とうをささげると、人々の祈りが天に昇っていくようだった。

世界中から多くの人が世界の平和や核兵器廃絶の願いを持って集まったことに驚きました 松島悠喜さん（豊岡中）  
68年たった今でも、後障害に苦しんでいる人がいるという原爆の恐ろしさ。二度と同じ過ちを繰り返さず、悲しい思いをする人が出ないように被爆地・被爆国として世界に訴えている、被爆者を含めた広島の人々の思い。訴えることの大切さを感じました

三浦すずかさん（豊田南中）

## 明日へ、伝えるために

安田女子高校の被爆桜は、今なお元気で、毎年美しい花を咲かせている。高校生らは桜や当時の状況、平和への思いを小中学生に語ってくれた。その活動は、代々学校の歴史として引き継がれ、下級生や地域へ戦争の歴史として語り継がれている。

今回の訪問では、小学生と中学生がチームを組んで行動した。学校や年齢を越えて共有し合い、つながり、そして互いに何かを学んでいった。

私たち大人も子どもたちに未来を託すだけではなく、自らが平和について考え、行動し、「生きる」ことを伝えることが、今こそ必要なのではないか。

## 子どもたちの心にもった

### 平和への願い

この派遣事業は、普段の生活の中で、当たり前になっていく「平和」の大切さをあらためて感じてもらうためにある。この2日間の体験は、小中学生の心に何を残したのだろうか。

体験を終えたばかりの34人に、平和とは、幸せとは何か、そして未来の自分へのメッセージを問いかけた。

その中には、彼らの心にももたれた「平和への願い」が込められていた。

## 平和とは、幸せとは

誰もが安心して、自身の大切な人と過ごせる毎日

山崎拓武さん（磐田東中）

当たり前のように食事ができ、当たり前のように学校に行き、当たり前のように帰ってこれる。この当たり前前にできている生活こそが幸せだと思う

中村真輝さん（城山中）

## 未来の自分へ

「平和」や「原爆の悲しみ」を訴えることは誰でもできると信じています

そして、平和をつくるには誰もが平和について考え、小さなことから努力しなければなりません

あのととき学んだことを生かし、あなたは平和をつくるために行動できていますか  
そして、あなたが今いるのは、「平和な世界」ですか

平野夏帆さん（竜洋東小）